



Title	弥生大形農耕集落の研究
Author(s)	秋山, 浩三
Citation	大阪大学, 2006, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/46575
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

氏 名	あき 秋 やま 山 こう 浩 ぞう 三
博士の専攻分野の名称	博 士 (文 学)
学 位 記 番 号	第 20535 号
学 位 授 与 年 月 日	平成 18 年 3 月 24 日
学 位 授 与 の 要 件	学位規則第 4 条第 2 項該当
学 位 論 文 名	弥生大形農耕集落の研究
論 文 審 査 委 員	(主査) 教 授 福永 伸哉 (副査) 教 授 小林 茂 助教授 高橋 照彦

論 文 内 容 の 要 旨

本格的な灌漑水稻農耕が始まった弥生時代には各地で多数の定住集落が形成されるが、そのなかで面積が 5 万 m² を超えるようなひととき大きな集落があらわれ、数百年にもわたって存続する現象がはやくから注目されてきた。本論文は、弥生時代の社会構造を解明するうえで重要な鍵を握る大形集落を俎上にのせ、出土資料の徹底的な考古学的分析を積み重ねてその実像を明らかにし、そうした弥生大形集落が持つ歴史性の解明に真正面から取り組んだ力作である。全体は 5 部 25 章からなる本論部分に序論を加えた構成で、分量は本文 400 字詰原稿用紙換算約 1500 枚、図表 361 枚におよぶ大作である。

研究の目的を述べた序論に続いて、第 I 部・第 II 部では弥生集落の形成を考える前提作業として、近畿および瀬戸内地域の水稻農耕受容過程について検討する。第 I 部では、弥生時代開始期の土器・土偶・石棒などの分析を通じて、在来の縄文系集団と新来の弥生系集団がおなじ地域内になかば「友好的」に共生していた実態をしめし、そうした集団関係こそが各地で弥生文化を比較的スムーズに定着させる背景になったと理解した。第 II 部では、豊富な土器資料を素材にして農耕社会成立期の具体像に迫り、広範囲で共通性の強かった土器に地域色があらわれてくる弥生前期後半ごろに地域的な紐帯が形成され、その後の地域社会の基礎となったことを指摘する。

第 III 部からは大形集落の構造解明と歴史的意義の考察へと論を進め、まず、その代表的な事例である大阪府池上曽根遺跡の実態解明に取り組む。池上曽根遺跡は、著しい集住や大形掘立柱建物の存在に加え、石庖丁生産や金属器生産の分業化などが指摘され、近年では「弥生都市」とさえ評されることさえあるが、秋山氏は出土遺物の丹念な分析によって集落の変遷・内部構造・生業活動・分業の度合いなどを詳細に検討し、本遺跡が本質的に大規模農耕集落の域を出ないものであるという重要な指摘を行った。第 IV 部では、大阪平野の主要な集落遺跡を中心に分析対象を広げ、居住域・墓域・生産域の関係、必需品生産における集落間分業の進展度、水田経営の技術的特質といった問題を詳しく検討し、弥生時代の大形集落に都市的要素を見いだそうとする議論の危ういことを重ねて主張した。さらに大形集落の形成と解体という現象については、弥生中期には水利システムが技術的に未熟で、その維持管理に際して集落構成員相互による直接的かつ日常的な調整が不可欠であったために集住が進んだのに対して、弥生後期になると自然地形を克服した完成度の高い水利システムが実現し、頻繁な調整と集住の必要性が低下したために大形集落が解体、分散化していったという独創的な理解を提示した。

以上の検討を総括した第 V 部では、極度の集住状態をみせた弥生大形集落の本質的性格は、「弥生都市」と呼ぶべきものではなく、日本列島の灌漑水稻農耕の技術段階に応じて展開した農耕集落の特異な一形態であったと結論づけ

た。

論文審査の結果の要旨

弥生時代にかつてない規模の大形集落が各地に生まれ、地域社会の拠点として機能したことが明らかになり始めたのは、わが国の国土開発にともなう発掘調査が急増した 1970 年代のことであった。以後、この大形集落の歴史的意義をいかにとらえるかという点は、弥生社会研究の大きなテーマであり続けてきた。本論文は、そうした研究史の流れや課題を的確にふまえたうえで、出土資料の分析を重視する実証的な立場を貫きながら、弥生大形集落の構造・推移・歴史性について独創性豊かな考察を展開しており、このテーマにおける体系的な研究として高く評価できるものである。

本論文の特筆すべき点は、まず大形集落の実態解明にあたって安易な推論を排し、出土した膨大な遺物・遺構の分析から信頼性の高い議論を立ち上げていることである。土器や石器の型式学的分析、水田や集落構造などの遺構論などに用いられた資料操作は手堅いものであり、秋山氏の考古学研究者としての十分な力量を感じさせる。また、大形集落内部での諸活動を生業維持に欠かせない「基礎的属性」と専門技術をとまなう「付加的属性」に分けて整理し、前者が一貫して卓越することに農耕集落としての基本的性格を見いだした点は、弥生集落研究の新たなアプローチとして今後継承されるであろう。

もっとも、本論文にも改善すべき点がないわけではない。水利システムの完成度の違いが大形集落の形成や解体に結びつくという主張は斬新ではあるものの、そうした集落が物資流通や祭祀の拠点としても重要な役割を担っていたことを考えるなら、やや一面的な理解という印象をぬぐえないし、階層分化の進展と大形集落の消長とのかかわりを重視しない主張については、さらに丁寧な論証が必要であろう。また、全体の叙述構成についても、内容的な重複部分を整理するなどすればいっそう明確な主張を伝えることができたであろうと思われる点は惜しまれる。

とはいえ、出土資料の実態をあくまでも重視するという明確な姿勢のもとにねばり強く考察を重ね、弥生大形集落に対する新たな歴史像を提示した本論文は、十分な学術的意義を有していると評価できる。よって、本論文が博士（文学）の学位を授与するにふさわしいものと認定する。